

【佐賀新聞・社説2016年8月20日】
新農相は「開門」をためらうな

国営諫早湾干拓事業(長崎県)の開門調査問題が、ヤマ場を迎えている。開門が開門に代わる漁業環境の改善策として示した「有明海振興基金」案は、漁業者側が強く反発している。先日の内閣改造で新たに農相に就任した山本有二氏は、基金案について「農業経営の発展に向けた基金、これについては関心を寄せてもらっている」とした上で「国会が始まる前に、現地を訪れてみたい」と直接漁業者や営農者から話を聞く考えを示し、26日を軸に調整している。2012年末に第2次安倍内閣が発足して以来、農相は林芳正氏を皮切りに西川公也氏、ふたたび林氏、森山裕氏、そして今回就任した山本氏と、くるくると代替わりしてきた。3年半で延べ5人とは、農政にどれだけの重きを置いているのか、疑わしくもなる。農相が代わるたび、就任会見で事態打開への意欲が示され、現地での聞き取りがあり、そしていつまでも足踏みが続く。国民の圧倒的な支持を背景に強いリーダーシップを発揮している安倍政権だが、この問題となると、まったく意欲が感じられないのは、なぜだろうか。政治が解決しようとしただけに、司法が和解協議を促したことそのものは、大きな意義があったと評価したい。

国と開門派、開門反対派の関係者が同じテーブルについて、有明海再生を含めた解決策を率直に話し合えるのならば、非常に好ましい。だが、裁判所が示した和解案には疑問が残る。「開門を前提としない」と、結論ありきだったからだ。この方針に沿って国が出してきた基金案にしても、これまでに取り組んできた有明海再生事業と、いったい何が違うのだろうか。ギロチンで堤防を開け切ったから19年以上が過ぎた。この間、開門調査を除く、あらゆる手だてを使って有明海再生を試みてきたのではなかったか。基金の額をめぐって「数十億円」「40億円では少ない」などと伝わるが、どれだけの額を積むかの問題ではないだろう。漁業者が求めているのは、将来にわたって漁業を続けられる「宝の海」を取り戻せるかどうかのはずだ。これまでに国は4県や各漁協から基金案に対する考えを聞き取ったが、賛同したのは長崎県だけだという。その長崎県にしても「開門しない」という前提に賛同したにすぎないのではないか。すでに福岡高裁では開門調査を命じる判決も確定している。なぜ、開門して閉め切り堤防を築く前の状態に戻してみる、という極めてシンプルな解決策だけが除外されてしまったのか、

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

理解に苦しむ。干拓地の営農に影響が出ないように対策工事を施した上で、5年間にわたって開門してみる。その結果をみれば、閉め切り堤防が有明海にどのような影響を及ぼしてきたかがはっきりするはずだ。基金案をめぐっては9月6日に、国が聞き取り調査の結果を長崎地裁に報告することになっている。現在の基金案が手詰まりなのは明らかであり、これまでの「開門しない前提」を覆さなければ事態は前に進まない。未来に宝の海を引き継ぐため、山本新農相は開門をためらうべきではない。

漁業者はどうやって生活すればいいのか？一刻も早く開門を！

【西日本新聞2016年8月27日】佐賀県／農相佐賀入り 「開門しない基金案 拒否」
漁業者ら国に不信感

国営諫早湾干拓事業(長崎県諫早市)の排水門開門問題を巡り、26日に佐賀市を訪れた山本有二農相と会談した開門訴訟の原告弁護団や漁業者は水産業の不振を訴え、山口祥義知事も有明海の環境改善を求めた。

一連の訴訟の和解協議で開門の代替策として示した基金案への理解を求めた山本氏に対し、漁業者は「開門しない前提の基金案は受け入れられない。一刻も早く開門を」と口々に訴えた。意見交換で山口知事は「確定判決を

国が守らない。何を信用すればいいのか、というのが漁業者の思いだ。有明海異変の原因究明の思いを胸に刻んでほしい」と苦言。太良町の岩島正昭町長は潮受け堤防の閉め切り前後に捕れたタイラギの貝殻を持参し「どんどん小さくなっていく。後継者も育たず人口も減っている。一日も早く有明海が再生するよう対応してほしい」と開門調査を求めた。

佐賀、福岡、熊本の漁業団体は山本氏に対し「裁判の当事者でない漁業者に基金案の受諾を求め、混乱する裁判の決着を図ろうとする手法に違和感を覚える。漁業者をないがしるにする不合理な提案は到底容認できないものではない」とし、訴訟とは別に有明海再生への予算を確保するよう求める要望書を提出した。訴訟の原告弁護団との意見交換では太良町のタイラギ漁師、平方宣清さん(63)が「タイラギ、竹崎カニ、車エビ、アサリが捕れなくなった。漁業者はどうやって生活すればいいのか。開門してください」と訴えた。「心に響くものは何もなかった」。意見交換の後、同町のノリ養殖業大鋸武浩さん(46)はいらだちを隠さなかった。2010年12月に開門を命じた福岡高裁判決確定から旧民主党政権も含めて農相は6人目。「ずっと何も変わらない。佐賀に来るのも大臣就任のセレモニーに過ぎない」と不信感をあらわにした。